

## G ネイチャーズ・エコノミー再考：ダーウィニズムからナチズムの時代に

世話人兼報告者：桑田学（福山市立大学）

報告者：中山智香子（東京外国語大学）

藤原辰史（京都大学・非会員）

18 世紀の博物学者・官房学者カール・フォン・リンネの「ネイチャーズ・エコノミー」の概念に端的にあらわれるように、18 世紀においてエコノミーという語は、①創造主の賢明なる事物の配置、すなわち自然の秩序・摂理を意味すると同時に、②そうした自然の秩序に関する知識に裏づけられた統治の学（家の善き管理）をも意味した。こうしたリンネに象徴される自然の秩序と人間の経済とを連続的に把握する視点は、科学の世俗化と制度化が進展した 19 世紀中葉以後、経済学においても明らかに希薄化し、市場における個々人の主観性や合理的選択の問題に焦点が移っていった。いわゆる「エコノミーの脱自然化」である。それ以降、「自然」と「社会」を接続するような思考は、素朴な「科学主義」や、あるいはその帝国主義や植民地主義、ナチズムとのかかわりから、少なくとも第二次大戦後の文脈では圧倒的にネガティブな意味合いをもって受け止められてきた。しかしながら、いまや経済活動がもたらす自然の秩序の攪乱が破局的な事態をも招くにいたりつつあるなかで、人文・社会科学と自然科学との連携とともに、人間の経済のあり方の根本的な再考が求められている。

以上の問題意識に基づき、本セッションでは、19 世紀末から大戦間期を対象に、「エコノミーの脱自然化」のプロセスでは括れない、経済学やその周辺の動向を視野に入れ、自然（環境・資源・土壌など）との関係において捉えられる「富・生存・人口の問題」がどう論じられた、あるいはどう論じ直されたのかについて再検討を試みた。戦間期のドイツを中心に「食と農の思想史」という人文学的視点から自然とエコノミーの接点を考えてこられた藤原辰史氏（京都大学、非会員）をお迎えし、中山智香子会員と世話人の桑田学を加えた 3 名がそれぞれ報告（各 20 分）を行った。

桑田報告（「エコノミーと生物学の交差：パトリック・ゲデスの経済学原理の分析」）は、19 世紀末のイギリス経済思想、とりわけ経済学方法論争を分析対象とし、そこにおいてネイチャーズ・エコノミーの問題がどのような形で浮上していたかを、スコットランドの生物学者パトリック・ゲデスの 1880 年代の論考を中心に考察した。英国科学振興協会における「経済学・統計部会」の廃止問題（1877 年）に端を発して生じた古典派経済学の凋落と経済学方法論争を背景に、ゲデスは、ポリティカル・エコノミーの起源である「オイコノミア」に立ち返る立場から、人間のエコノミーを「環境と有機体との相互作用という生物一般に妥当する問題の一つの特殊事例」として把握する視点を打ち出し、「自然における人間とその位置」という認識に基づいて、経済学原理を「生命」の事実（物理学・生物学原理）と整合するものへと作り変えようと試みた。注目されるのは、こうしたコント主義と

もいえる科学としての経済学の再構成の背後に存在した、80年代のいわゆる「貧困観の巡回」とそれに呼応して隆盛したスラム改良運動や社会主義への関心である。ゲデスは、当時の人口—貧困問題の根幹を、安価・劣悪・短命な消費財の大量消費とそれにより扶養される安価の労働力の増殖のシステムとして捉え、それがもたらす人間的な生の質的劣化とシステムそれ自体の資源的限界を指摘するとともに、もっぱら「胃袋のニーズ」の問題しか見ることのない「自称・功利主義経済学」の思考様式を批判した。ゲデスはそこからジョン・ラスキンが唱えた生産と消費の洗練化（＝協同組合にもとづく産業改革）をつうじた、有機体の環境へのよりすぐれた適応の問題として生態学的な都市改良の方向性を探るにいたった。こうしたゲデスのエコノミー論は、生物進化論と社会改良主義が合流した19世紀末のネイチャーズ・エコノミーの新しい論法を体現するものとして捉えることが可能であり、またそこに現在にいたる経済学の系譜のなかで失われたアクチュアリティがあることを指摘した。

続く中山報告（「胃袋の平等」と産業革命以降のネイチャーズ・エコノミー）は、20世紀前半のネイチャーズ・エコノミーの問題を、イヴァン・イリイチの「現代の貧困化 modernization of poverty」という位相に接続するかたちで分析している。19世紀前半に生じたネイチャーズ・エコノミーの議論の衰退は、産業革命以降の経済全体に占める工業（インダストリー）の重要性の高まりと農業の重要性の相対的な低下の結果として捉えられるが、しかし20世紀前半の世界戦争と大恐慌は、市場システムをつうじた食糧をはじめとする生活物資供給を機能不全に陥らせ、人間の身体的次元（生き物）の問題を改めて浮かび上がらせた。まさに大恐慌を契機に、人びとを「食べさせる」という、いわば「胃袋の平等」という「正義」の仮象に訴え、急速に台頭したのがナチス・ドイツであったが、中山氏によれば、この「胃袋の平等」という正義の仮象は十分な批判的検討に晒されぬまま現代にも引き継がれている。そこで、この問題の歴史的なコンテクストを分析するため、中山氏は、大戦間期から戦時期にかけてアメリカで生じた農業生産物の市場化・産業化をめぐる論争に注目し、とくにそのなかで農業経済学者 Th. W. シュルツが演じた自由主義的なスタンスがもった意味を考察している。すなわち、地域の農業者の特殊利益の保護を否定し、農業の産業化を唱えるシュルツの立場は、やがて食糧増産あるいは「緑の革命」という形態をとって世界戦略の基軸となり、結果として「安価な食物」（＝産業化した工業製品のような食品）の普及へとつながっていった。中山氏はここに、アメリカ主導の食糧政策がもたらした「現代の貧困化」の一つの歴史的起源を指摘する。まさにイリイチが「逆生産性」として分析した、産業によって規定され生産された商品の消費が生む産業社会特有の「貧困」「内的な不満足」「格差」といった問題の出現であったといえる。

最後の藤原報告（「1920年代の「家政学」と「農業経済学」における「家」と「土」をめぐる思想）は、1920年代の日独に発展した「家政学」と「農業経済学」を自然（内的自然と外的自然）と経済のはざまにある「亜流」経済学としてとらえかえし、それらがもちえた多様かつ豊饒な可能性とともに、ファシズムへと接近した契機を考察している。まず1920

年代の歴史的文脈として、①第一次世界大戦による破局、②「デモクラシー」の時代、③生命分野（食品と農業）の産業化の3点が示されたうえで、アメリカのE. S. リチャーズ（1842-1911）やドイツのシャルロッテ・フォン・ライヒェナウ（1890-1952）の家政学、ドイツのF. エーレボーや日本の横井時敬（1860-1927）の農業経済学が、完全に市場化することの不可能な人間の「身体」や有機体としての「土壌」にどう向きあったのかという視点から論じられた。そこから浮かび上がる共通点として、「亜流」経済学がいずれも、経済学が見落とした「家」と「土」の再生産過程、すなわち生産において肉体と土壌に不可避に生じる「疲労」（疲弊）とその「回復」という問題にいち早く着目し、独自の学術的視点を提示することで、現代の計量的な経済学とも異なる仕方で、経済学の対象範囲を広げるものであったこと、またそこに「亜流」ゆえのアクチュアリティがあることが示された。しかし同時に、藤原氏は、それらが、ナチス・ドイツにおける「余暇の組織化」や日本の「天皇中心的農本主義」など、生命の再生産過程をさまざまな形で組織化するうえで一定の機能を果たし、ファシズムへの架け橋ともなりえた点、したがってまた占領地や外国人労働力という形で作り出される「外部」との関係から捉えかきさえることの必要性を強調された。

以上の3つの報告から、19世紀末から大戦間期をネイチャーズ・エコノミーの視点から切り取ることで、19世紀的な市場システムの破局の時代に、人間の生存・身体と自然の物質性とを同一の次元から把握する新たな科学的思考や権力のあり方が問われていたこと、しかしその両義性が十分な検討を経ぬまま周辺化され現代にいたっていること、だがそれゆえに現代的なアクチュアリティをもっていることが示されたのではないか。

報告の世話人から簡単なまとめを行った後、残り約45分間の質疑応答では、3人の報告に対し、多岐にわたるが、いずれも本セッションの趣旨や各報告の議論に内在した本質的な問いが参加者から出された。生活の合理化における権力の介入や性分業の問題、ゲデスにとっての有機体の意味（個体か社会か国家か）とその妥当性、「胃袋の平等」という規範への対抗軸のあり方、大学における家政学の位置や制度化の歴史、世界システム論（周辺におけるモノカルチャー経済）との接続の可能性などの論点をめぐって、各報告者とフロアとの活発な議論を行うことができた。議論を通じて各報告に通底する問題意識や今後の課題が改めて浮き彫りになったのではないかと思う。セッションの参加者は予想を超えて70名弱に達し、レジュメ・資料が不足するなど一部の参加者にはご迷惑をおかけしたが、最後まで熱心に議論に参加いただけたこと、心より感謝したい。限られた時間のなかで十分な議論を尽くすことはできなかった論点も多々残されたが、今後のさらなる展開が確信できるセッションとなった。